**寄　稿**

**アイリス・マードックとサミュエル・ベケット**

**平井　杏子**

　『網のなか』の主要なモチーフが、言語への懐疑と沈黙へのこだわりであることは、ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』に因む本書の題名からも明らかだが、このときアイリスが〈言語による伝達の不可能性〉とそれに繋がる〈沈黙〉、あるいは〈無〉の充溢性を主題とした『網のなか』において、ベケットとヴィトゲンシュタインにひとつの交錯点を見出していたことはほぼ間違いないだろう。アンソニー・クローニンの『サミュエル・ベケット――最後のモダニスト』には、一九三〇年当時、エコール・ノルマル時代の最も親しい友人の一人であったジャン・ボーフレについての言及があるが、ボーフレは当時のフランス哲学者にしては珍しくヴィトゲンシュタインに通じていたという。ジェイムズ・ノウルソンが著書『ベケット伝』に引用したベケット書簡には、ボーフレがベケットのもとに頻繁に訪れては知的会話を交わしたことが書かれている。ベケットが本格的にヴィトゲンシュタインを読んだのは六〇年代とも言われるが、この時点で何がしかの示唆を受けた可能性は大きい。

　いずれにせよアイリスは、ベケット自身がヴィトゲンシュタインを本格的に読むより先に、またワットを〈ヴィトゲンシュタインの化身〉と言ったリチャード・コーや、『論理哲学論考』を熟読したベケットがヴィトゲンシュタインの〈言葉と数の唯我論〉の可能性に取り憑かれていたというイーハブ・ハッサンや、この二者のあいだに共通した〈二つの神秘的顕現〉を見出したＥ・Ｍ・シオランなどよりもずっと早く、両者の類似に着目した一人であったと言うことができよう。だが、アイリスの言語分析哲学への共感は長く続かなかった。彼女がハンプシャーの『思考と行動』を言語分析哲学の一典型と見做した上で、とくにその〈唯我性〉に厳しい論難を加えたことは知られる通りだが、その矛先は同じようにヴィトゲンシュタインにも向けられた。ではなぜベケットだけが同様の批判をまぬかれたのか。

　もしかすると『網のなか』の構想にあたって『マーフィー』や『ワット』を範としたとき、すでにアイリスは両作品に共通する〈無〉や〈沈黙〉に、後年、思想の根幹とするギリシア的イデア論に通底するものを感じ取っていたのではないか。そうでなければ、六〇年代を通し、プラトニズムの観点から実存主義や言語哲学、ロマン主義から果てはモダニズムに至る文学思想を、〈唯我的〉という一点からことごとく批判したアイリスが、片やそれと時期をひとつにして、ある意味でこれ以上の〈唯我的人間〉はいないと思われるマーフィーやワットの創造者ベケットにたいし、無心の私淑を語りつづけていたことの説明がつかない。四〇年代初頭のオックスフォードではプラトンは深い考察の対象とはされず、アイリスが本当にプラトンを知ったのはそれより後、シモーヌ・ヴェイユを介してであったと彼女はコンラディ宛て書簡に記している。つまり言い換えれば、ヴェイユによって介在されたプラトニズムに、アイリスがベケットに惹かれた一端があるのではないかということである。そこにあるのは、苦悩や死にたいするプラトンの〈ストア的平静さ〉とでも言うべきものである。アイリスが一見〈唯我的〉と見えるマーフィーやワットのうちに見たのも、苦業にたいするこのストア的平静さと、ひたすら自己のうちに受難を収斂させ、他者への苦悩の伝播を断ち切る修道僧めいた強靭さだったのかもしれない。

　付記　　詳しくは拙論「アイリス・マードックのベケット」（『サミュエル・ベケットのヴィジョンと運動』未知谷　12月刊行予定）を御参照ください。